

金賞

TPM の停滞・衰退、流れを私が止めたい

ヤマハ発動機株式会社

川島 正裕

「昔はこれくらい、自分たちでやっていたのになあ。」この一言を発したのは先輩で、昔 TPM 活動に尽力されていた方でした。

生産職場の昔と今の設備に対する理解や知識、トラブル対応力の差へのやるせない思いから、この一言を発したのでしょう。

私は、保全職場に配属されて 12 年目になる 31 歳の中堅保全マンです。新人の頃は与えられた仕事だけで精一杯で、保全に関する知識や技術が皆無でした。しかし、上司や先輩のご指導により保全レベルをアップさせ、今では複数の設備の主担当を任されるようになりました。そして保全職場の目標である、ベキ動率 100% 達成に向け日々、主担当設備を始め、工場内の幅広い設備で故障低減活動に励んでいます。

冒頭先輩の言葉、「昔はこれくらい」のこれくらいとは、ワーク搬送チェーンの給油です。経緯は、ある生産職場からの一報でした。「上部の搬送チェーンから異音がするので来てもらえませんか」

駆けつけた私と先輩はすぐにその原因が分かりました。異音の原因は給油不足とチェーン油上たるみによるものだったのです。その様子は潤いが無くガラガラにたるんだチェーンが、「ギャンギャンギャンギャン…」と音を立てていました。その機械音はまるで「壊れる前の最後の警告だぞ！」と設備が泣きながら訴えているように私は感じました。私たちはその日のうちにチェーンの張り調整と給油を行い異音の原因を解消しました。

この出来事で、薄々私が感じていた工場の TPM 活動の停滞・衰退が確信したものとなりました。これはマズイ、なんとかしなければと考えながらも、どうにもできない日々が過ぎました。そんなある時、私の元へ部品管理職場の職長からこんな依頼がありました。

「ウチの設備でチョコ停の頻度が増してきているのだけど、何とかならないかね」

私は工場の TPM 活動を再燃させる足懸かりになるチャンスだと思い、職長へ TPM の基本である自主保全のステップ展開を勧めさせて頂きました。これ

なら設備面と安全面の人財育成にも繋がり、チョコ停も潰せると説明すると、心良く承諾して頂き、職場7名、保全2名で「自分たちの設備は自分たちで守る」をモットーに活動を始めました。

準備不足や操業の関係でスタートがもたついたり、メンバーの士気がなかなか上がらなかつたりで、進行に苦労しましたが、なぜこの活動が必要なのか、どのような効果が得られるのかを熱心に説明していくと、ステップを踏むごとに一部のメンバーの意識に変化が現れるようになりました。設備に触れること、設備を操作することに興味や関心、楽しさを覚えてくれるようになりました。終盤では、メンバーからやってみて良かったとか、意外とやりがいがあったとか、この設備については自信ができたなど、大変貴重な意見を頂くことができました。この職場の方のおかげで私は大切な事に気が付くことができました。それは、TPM 活動の停滞・衰退の理由は操業や職場の意気込みだけの問題だけではなく、教えることができる人がいない、やりたくても方法が分からない、設備操作方法を知らないといった、TPM に取組める体制が失われつつあるということです。私はそんな状況だからこそ、専門保全を受け持つ私たちが、各職場への協力を惜しみなく行い、TPM の必要性を常に訴え、一緒に作り上げていくべきだと考えます。

私はこれを機に TPM 活動の再燃と活性化をさせ、TPM 全盛期に負けない現代仕様の活動を繰り広げていきたいと思います。私の TPM は長く険しいが、やりがいのある仕事です。